

かささぎ通信 第76号

2019年 1月 11日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年十二月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集かささぎ物語』（一九九五年、刈谷市教育委員会）所収の「一片のパイ」「簪（かんざし）」を読みました。

「一片のパイ」の初出は同人誌『新児童文学』第四十七号（復刊十五号）（一九五二年十月発行）です（『森三郎童話選集かささぎ物語』の酒井晶代氏による解説「森三郎・人と作品」）。

この話は、ある国の王様と妹との「一片のパイ」にまつわる三回のエピソードで構成されています。一回目は幼い時に、二人で分けるはずのリンゴのパイを、兄が一人で中のりんごを食べ、妹にはパサパサの皮だけを渡した苦い思い出、二回目は、尼さんに身を変える運命に陥った妹が、それと知らずに、戦争に敗れて獄舎に身を投げられた王様に、尼長から貰った古い一片のパイを与えた出来事、三回目はそのことが元で尼寺を追い出された妹の尼さんが、今ではパン屋さんの主人になった王様から一片のパイを恵まれたという不思議な巡り合わせです。王様が自分の行為を悔い改め、気の毒な女の人にはいつでも一片のパイを恵むようになったことは、よく理解されます。しかし森三郎が書きたかったのは、パイを与えた妹の、「施し」に対する迷いではないでしょうか。尼寺を追い出されるとき、妹は「自分のいらぬものを神様の名で罪びとにくれて、相手を喜ばせたことの厳しい罰」と感じ、試練を受け入れます。

三郎はすでに一九四九年の「ザアカイとユリ」（『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』）で、新約聖書「ルカ伝」の章を根底に置いた作品を発表しています。後に自身のことを「教会へはいかないクリスチャンなのであります」（『写生文と童話・下』『鈴木三重吉『赤い鳥』通信、一九九〇年』）と言っています。この「一片のパイ」は「マタイ伝」第6章の「施し」についての章句を意識しているように思われます。

「簪（かんざし）」の初出は単行本『うぐいすの謠』（一九四三年、拓南社）です。これは、親同士の間で許嫁（いなすけ）として生まれてきた、二つの村の名主の子供の話です。名主源四郎の家の男の子は月蝕の晩に生まれたために、言い伝えにより涙を飲んで捨てられ、代わりに小作の子が息子源四郎として育てられます。一方、捨てられた子は隣れみ深い庭師に拾われ、庄吉と名付けられ育てられます。お静と名付けられたもう一人の名主・作兵衛の娘は、大きくなると、庭の手入れの時に連れてこられる庭師の息子庄吉と、いい友達になり、ままごと遊びの夫婦になります。さらに長じて庄吉が庭師として作兵衛の家に入りする頃には、互いに口を利くこともなくなりですが、二人の心には昔のままの親しい気持ちは消えませんでした。でも、お静は許嫁の源之助の下に嫁いで行きます。

タイトルの「簪」は、幼いころのままごと遊びの小さい奥様の花かんざしと、長じて後、自分の部屋で琴を引くお静の髪を飾る銀のかんざし、そして、山道を揺れながら嫁いで行く駕籠の中で、お静の髪から抜け落ちた籠甲のかんざしをさし、二人の意識下の好意を象徴していると思われまます。

三郎は単行本の「あとがき」に次のように述べています。

「簪」は創作で、頭でつかちなものになりましたが、手前味噌を並べれば、人生に於ける「偶然」と「約束」とについて考へて見たつもりです。（一二八頁）

『赤い鳥』に掲載された三郎作品には「赤穴宗右衛門兄弟」「目ぐすり」「かささぎ物語」「虹の松原」「めぐりあひ」「とんび風」など、「約束」「偶然」をモチーフにした作品がいくつもありました。『赤い鳥』終刊後に書かれたこの「簪」は、三郎が作家として一貫して持っていたテーマを形にしたものということにならないでしょうか。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）

二〇一九年二月八日（金）午後一時半～三時半

「ジャンケン橋」「姉」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）